繪本豐臣勲功記

初編

六

へ遠13
2209
6

繪本豐臣勲功記初編卷之六

目録

岩倉合戦　柴田権六猛勇
附　秀吉知謀
羽吉郷窩　蜘蛛焼起岩倉山
附　姫尾勇戦

門へ遠13
帙2209
巻6

木下上洛以長短槍較量

附 秀吉得勝

淺野弥兵衛逼大己蹴勅

附 木下猶此

東京帝国大学図書

繪本豊臣勲功記初編巻之六

江戸 八功舎 德水 刪補

岩倉合戦柴田勝家猛勇 秀吉勸謀

悪鬼もよく德ふ感じ。毒蛇も智ふ伏まふ至る。信長怒氣と恣ふ一。一遭秀吉と罵逐一けれど。從来の功多ゑ捨てれば用徒ゑ〜ぬ緯ふおもひ。密ふ呟て木下グ。秘計の量と詳ふ問ふ。不思議の神策ゑりける由ふ。信長くるとご感悦せられ。これと用ひて岩倉攻と事と決一。永祿二年五月廿八日の蛍天ふ出馬一ゑひ。吉例ゑりとて柴田權六郎勝家と先陣とゑ一。其勢都合五千餘騎清洲の城と揺出佐屋川當て進発せり。時ふ清洲の留守宮ハ織田信廣ふ命ぜられ。既ふ信長佐屋川の東ゑ出て。ちごらく

馬と立させをひ。後陣の勢と待んとて。衆隊の諸將と一列に勒へさせ。信長柴田佐久間と呼されて。我今日の出陣と。伊勢発向と故露せ〻。敵と誑く謀畧をして。誠に此より軍途と轉じ。岩倉城へ推進て。只一揆に攻陷さんと。秘策と慮り〻をて。城中定て剛断〻在べし。不意と謀てこれを撃に。大利と得ざる事久しある。進めや兵輩吾に續け。と勒と右をに引遣らし。馬の頭と北方へ推向るよと見えしが。飆の如く駈ゐへば。柴田佐久間侯大將の詞と聞て見へ駭き見へ驍んで馬を整し。是亦君の清智畧今に敢めぬ事をなら實に勇〻き軍配をて。先馳向て功誉とをさん。進め〻と懋き合。先進に〻進んされ。茲に尾州丹羽郡。岩倉の城と稱るに。織田の一族伊勢守信昌の居城をし〻。去ぬる弘治二年の夏。織田信行の謀反に與カし。信長に敵對せり。信行既に滅亡して後。信昌降参に迫ぶとも。是真實にあらざれば。遂に獨立の色と顕せども。信長信義と守る。織田の血脈と思召され。時節もあらんと棄置に。信昌が家運こゝに滅亡をべき時節や来つらん。重き病痾に犯惱せられ。療養もれども。こと稱たび。終に棺椁の沙汰に関る。信長これと聞〻めされ。時を来ると。攻撃けるに。岩倉の老臣。織田七郎左衛門。同孫左衛門。山内猪之助をとりて。智勇の輩。幼主と守立。城中所志と一致を〻。防禦の備厳重にして。韋て降参の氣色をし。是に信長まさに〻瞋て。諸軍と向て攻るとの〻ども。要涯嶮〻く兵器富。墻て凝守る兵士輩に。

頗勇烈なりければ。防戦もすること激然なり。これがために清洲の進兵。一度も勝利あることなし。然るに這遺秀吉が。密に言條すのらせし。謀略と用ひ給へ。伊勢発向と披露せらば。岩倉城の人々へ。咱身の事と思ひもよらぬ。信長勢州へ乱入。合戦央に至る頃。清洲の城へ蹇地に推進。柔弱なる信廣と退退け。城乗取らんと歓驍を。防禦の準備へ餘所にあり。只出陣の部伍せんと。自己々が在所へ趣き。身據のみと専にして。勢州攻と待ちぞこそあれ。永禄二年五月廿八日の蚤天に。信長清洲と進発しければ。岩倉城の大将織田七郎左衛門。山内猪之助倚。これと聞て大に悦び。清洲の城を奪ふことを。一両日のうちに在と酒宴と興ける其所へ。信長五千の勇士を率ひ。佐屋川

を渡て進し。息も継せず正一門地に。岩倉城へ推進る。先陣へ柴田勝家七百餘騎と魚鱗に絡ひ。岩倉近くなるや否や。先陽に備へ鳥銃撃蒐。烟の下より鎗と入。単騎急に攻起る。城中の兵準へ思設けぬ意なれば。これと許駭噪き。馬に鎗と轉動も。織田七郎左衛門同孫左衛門。山内猪之助へ。有係に聞ゆる英雄なれば。些とも驍ぎ身と鎧たせ。自勢に下知して弓鳥銃の備と立。炮矢発くと射出撃出。此と専途と戦ふ五千餘騎の清洲勢に。三千有餘の岩倉勢。さのみ劣る軍なられど。剛新と攻着られれば。用に立べき武士へ恥く。防禦なく危く見えつる。斯てあらばと七郎左衛門。諸士と呼寄。吾打発て一戦せば。其際に足下倚準備とせられ。

城の四方と守固めよ。一隊堅固に決めべ。自餘の兵士はものづらい
踏止て領門と堅めん。心得よや各〻と下知あり。捨て正冠に進む。
嚴門八文字に推開き。鷲地なりて出。洪ごとき清洲勢の。
正面中へ捌て掛る。攻兵の先陣柴田勝家。七郎左と見る
とりも。猜はどぞんれ自軍のものども。渠とうち捕甚圖ふのり。
著投て城と乗取る。進め〳〵と士卒と烈まし。面も振らを
捧ぎりけり。七郎左も權六も。かくまに知己あれば。本日の詞と
羞ぢりけん。柴田勝家が七百餘騎。七郎左が五百餘騎と。中
に捕こめ歐んとも。然とも七郎左は。今日と限りと猛氣と烈と
まし。打ども突ども事ともせず。集散離合に駈遣り。淺深出
没に術と顯し。鎗に敵兵多く歐捕。四邊と拂て戰へば。

渠一人に斬起られ。取決にあつて
引退く。七郎左は得さりや嚏と鎗の柄中と握整し。一喝叫ん
で馬に拍れ。輪寶の山と崩を像く。一鎗棚に五騎七騎
束ぬるを見よ死んで〻。進兵もこれに攻位を。敗体起て見え
ざると。柴田見るより。啊呀。謂甲斐なき自兵の挙止。蓬く
崩れて大將の。笑はせもとと顧ざるや。先阿漢が一戰し〻く。
自兵の胴と醒さまべし。とのみ鏈と枝坂整し。七郎左は
に渉合。喃孤らしや今日の見參。盡情の勝負して日来の
好交とならまべし。と莞尓と笑ひて立對ば七郎左も
片頬に笑ひ。唯〻殊勝らしや權六郎。汝と我とは浅から
ぬ。縁ありみづら戦國の。習通といふぜん。先年清洲に一別

して、遍く敵とへ、あつれど往日の情に忘るゝ。必も喰ふ輸るなと詞を懸て戦ふ。七郎左衛門の母と、權六母と姉妹なり。權六幼き時は七郎左衛門とともに育てり。両雄ともらぬ龍憤虎怒。火烟と充る四臂八蹄。巴の像くに旋るとかゝへ。卍の字躰に砕結ぶ。虚とゝめて實に鏑鎗あれば。實と虚として引棟あり。一乾一坤。高右低左。一瞬もいとゞなく。時移るけで闘ひ一ぶ。七郎左衛門は權六より。年も遥に老さるゝへ。敵よりの疲あれば。いつしか腕腰撓を来て。ちらら衰へ退戈ふ。三去三ひと見て。得ると權六又ふと烈ゝ。一声発して搦発せば。有係に猛き七郎左衛門。鞍上ふ立ちなを。身と轉ずして撞と墜。勝家おのく馬より跳飛。七郎左衛門に無頭とて。要時がうどに拵合しに。權六

力や勝まけん。七郎左衛門と捕て曳。終に頸をぞ掻砕る。大将敵れて殘し兵業。右轉左倒に敗北し。身憂しなそ。その内に三百餘人取て返し。猶止て烈しく戦ひ。員とそして戦損せり。清洲勢倘威と援さも。柴田も大に疲をければ。看入ふまくき賛力もつき。に要時息次在さりと。信長遥にこれと見ひ。森三左衛門。池田勝三郎と馬系に召され看ゝ權六に疲をこそ。渠に代りて紐隊に進め。快推出せと令し。五人。拜膜ぞと森池田一千五百餘兵と率ひ。突然として推発し。柴田に代りて攻着ける。權六これに助帯られ。魁隊と譲て牽退き。信長權六と近くめされ。今朝ゝりの戦繁。主従力と竭せしのそう。賜敵の大将なる七郎左衛門と敵る

柴田勝家
勇を震ふて
織田七郎
左衛門を
撃伐
む

攫比類なしと謂つべし。得了ふ鬼と名を得し權六。剛のものと
夥次。貴しつべし勝家も。氣色なくして居うける。斯て新隊の
森池田ふ柴田ふ代りて岩倉。犇地く攻ふ推登る。息とも次
で責著るど。城ふ隊配堅固ふもつれば。大將戰死しつるも。
異ともうさで鳥銃失鏃。もつても惜まぬ故出るふ。池田も森も
攻あぐむ。增て六月の末ふて。極暑ふちつき時節なれば。甲冑
の鐵も鋪るなり。日ふ照られて熱ければ。攻惱ぐる現相を信長
伝より御覽じ。使をたせて宣ふやう。日中ハ実熱烈しく
て。攫くふ便宜うらぜ。日輪西ふ傾くころ。總驍ふて攻破らん。
ふ。まづ退て休息せよと指揮ふ。さがひ森池田。自兵を收伍て
退くりけて。玄ふ木下藤吉郎ハ。軍議の席ふて過言ふ信長

の缺籍と奉て。既ふ御前と遠ざけらるれど。君臣の心一致ふて。
情ふ計る事なれば。方便炎天の疲労と厭ひ。軍と羅さる機
會を察符。林佐渡守ぞ陣中ふ到り。對面ともければ左右ふ
木下と招容。来意いふと是と問ふ。藤吉郎ふて又き。小子誤
て君ふ過言し。昨今缺籍と奉命うて。今脫ふ後悔詮ふ。
荀且の身ともつて。高禄と賜り。諸老臣の列ふ經昇る輝
まつて君の厚恩ふて。這大恩ふ酬んふ。一命と戰蕩ふ
棄るふ如くぞ。然ともも新る缺籍の身ふて。御先と蒐る輝
も稱べ。賜と千ふ新のまり。憐ま冥下の料理ふて。今日
出戰の御免と奉命。いさぎよく戰死して。君の御恩と報ずる
御勸解とよきふ晞ひいると。涙と共ふ喞ふぞ。佐渡守も便ふ

ゆゑ。咱今所為、まことまうし出。所勧解のよまち最易けれど。なほ
柴田と憑まざる謂せの如く柴田が称へ。今日無類の功といひ。
這人ならば萬の事。睇望の稱えぬことなければ。素より小子
渠の人の。心ふ深きをあり。それば。小子一個柴田が称の所陣へ
参るも憚あるゆゑ。足下ふ攪拔と称ずるとふ林いらむ
怜と。柴田が陣営体ひ。勧解と憑とのふさんふ。いざ来
ふ。ことて忙ぐしく。彼所ふ到て権右ふ。對面ふ。藤吉郎が稟
せ如く。憑むうと告ければ。柴田も大ふ意解。奈何ふも素
より藤吉郎。挿嘴ふ吐くとの。君のうあふ忠ことあれ。不忠ふ
ふべき事もせざれば。切悪しとふふもあらむ。這遺の缺藉ふ
東西懲して。已後過言せぬとふ詞の誓ふ相違なくば。渠が

心もまことに可愛し。先教訓とのひ含め。ちらして所為とりなさん。と
藤吉郎と呼出し。いろふ〳〵藤吉郎。只禍の本なる言。方僅とそ
思當てつらめ。老呂達の順次も待よも。意の隨ふ奉止なして。
傍若無人の事ども。已后いよ〳〵謹惶。ちりふ発言まべからぬ
ぞと言懲もふぞ。木下も赤面の慙とふ。最ありがさき所
教訓。骨髄ふ徹しそむぐ〳〵。倘存生てありもせば。必所恩
と存まべし。戦死ときば泉下より身影を護りなてまらんと。
泪ぬぐらふ嘆くふぞ。有係ふ猛き鬼柴田も。そろふ憐憫
ちつ。然へ所勧解のふさんと。藤吉郎と伴なて。信長の所為へ
出。勝家謹てのふもをり。秀吉先日。評定の席ふかめて。過言
のゆゑ〳〵咎ふより。所缺藉と奉命とと。實ふ後悔千万なり。

日来は帝陣のさびしみ。帝魁と嵬まのらせつ。命の涯まで攘きしが。這遁い缺藉の軀ゆゑ。一命と投げうつて。帝恩を報ずる戰せんかも。君の帝免と奉命らでは。帝旗ゆ魁を奪はん緯。恐おくいなそ。今ゆ帝の陣ゆ来て。一向帝勸解の詞とさのみ。魁ゆ獨ちんとたもゆゑ。おそれなから言狀せり。怜藤吉郎が前功ゆ愛ゑひ。帝赦免あつて。先陣ゆ加へさせふとらば。ゆ居はせをもこりがて。と稟しあるゆ織田殿も。素より期しする緯ゆしいれば。面色吟しとやそらげ。ゆひ。家も赦しがけれども。大功ある柴田が勸解の。面目ゆ免じて魁駈の事をゆ赦まじし。倘功あらば缺藉とも宥免まじし。嚴しく稟着られよと命と奉て權六郎。君命もろそうゆるやう。藤吉郎ゆ言授ゆし。然べ直ゆ功と連。慢しく攘けうく烈め。と魁軍のうちゆ加へうう。木下かぎりゆしく悅喜ゆ。柴田を敬遣付緯。然して勝家ふうち對ひ。小子ひとつの計畧あり。駅卒五百人を借ゆと。いかゆ權六厥いろゆ。謀術ときうんと問と秀吉耳ゆ倚如斯く。と苦るゆ權六さしうえ。斯はあり〜ろき計策ろる。然べ頼ゆて借ゆん。と信長の陣へ来り。岩倉城の背山ゆ。ひとつの計畧ゆるふこう。駅卒少く借ゆへ。と言狀まるゆ信長も備こそ猿が智惠をもて。おのろき事ゆ出来ると。情ゆ喜び權六ゆ願の隨ゆ。駅卒と五百餘人分ゆへぬ

藤吉郎密謀燒起岩倉山 附 堀尾勇戰

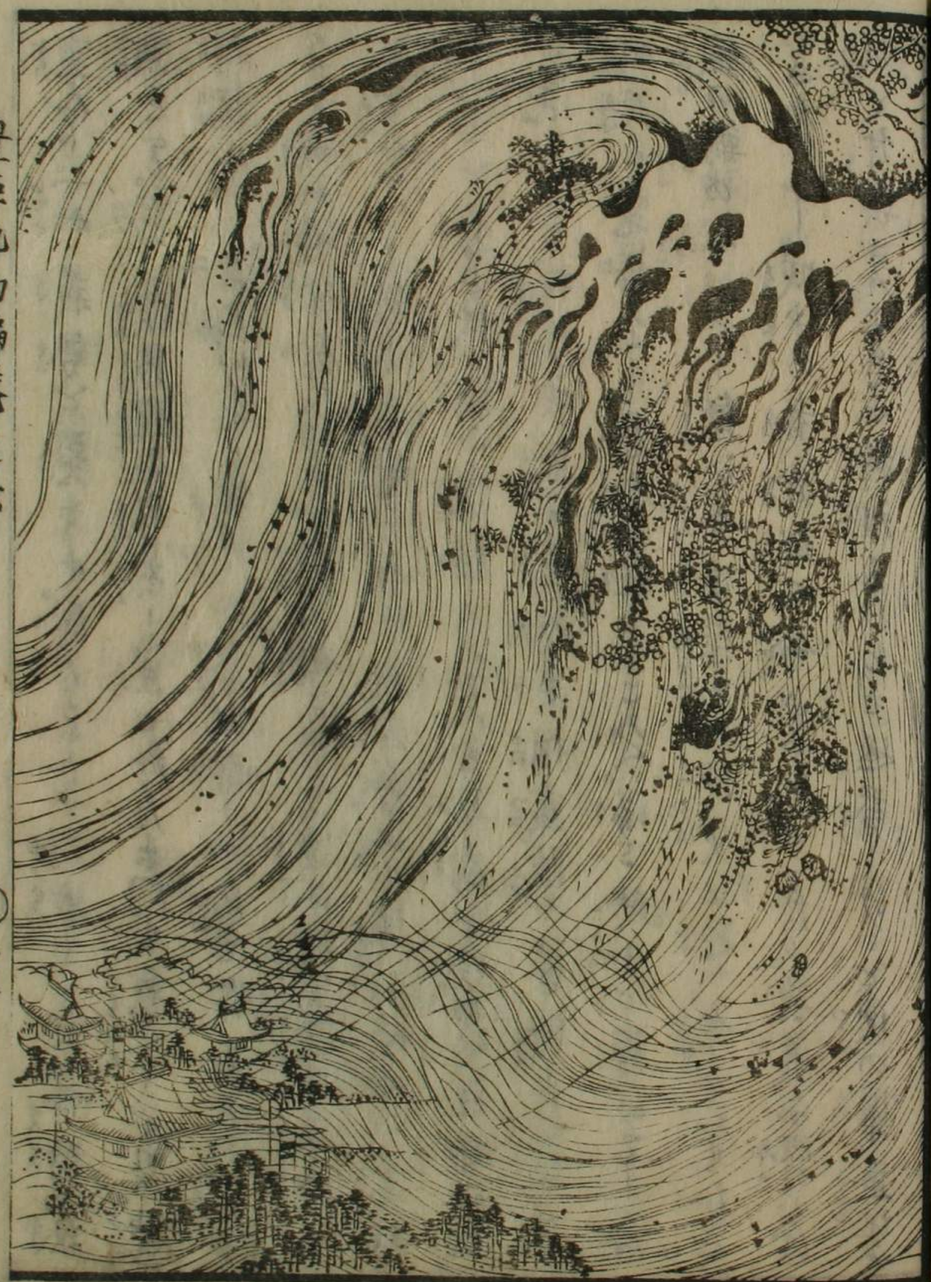
宿曜經ふゑ。五月廿八日は參宿直の日ゆり。參宿直の中の刻は翼宿

直ふ中てあとあり。孫子これを説て。火と放つふ時あり時ふい天の燥るといひ。日とふ月の箕壁翼軫ふ當るといふ。凡この四宿の日。必ず風と起るといふ。然るふ木下藤吉郎秀吉。翼宿直の時を謀て。既ふ設けー妙策をぶ。岩倉山ふて行ちんと。五百人の駅卒を借うて開も這岩倉山といひつるふ城の坤ふ當て。其際めつとも鄰うーぶ木下秀吉這ふ登て。謀を施さんと。五百人の駅卒を借奉。蛍くも山ふ攀躋り。柴炬火の大具を準備ー。柴田ふもう〻諜合せ。時刻遲ーと待在う。茲ふ岩倉の勇士。堀尾忠た門吉久。一子仁王丸（後ふ義勇吉晴とのの。堀尾其初高階氏在原姓ふ尾州中島郡村の住人といふ）とのふ者あり。父子雙立ふ猛勇ふーて。武術もまて類なーぶ。これども父ハ病ありーが。仁王丸民管ふ出戰の事を望けるゆゑ。これを制するふ詞うう。然ハ汝の助力ーて。

一軍きんあと。自兵うつふ牽從」。東門左右と推放き。先陣柴田が傍伍ふ突投。縱横ふ磯ふ砂旋る。その猛きを大象が。渦河と渉るふ髣髴ふれば。敵もる兵のさらふのきと。嫡子仁王丸吉晴。今年積て十六才。森池田が陣ふ斬投。勢ひ竹の爆るごとく。或ハ瀑の天邊ふ。漲落るごとくさまて。趨つ捧りつ刃光を散ー東西を碎き。南北を破り。自由自在ふ戰ふう。木下秀吉。山上ふ遥ふこれと纏ふて。誰うある山と下りて彼猛少年が名と問ふ来ふ。囑けるふぞ一個の士卒。心利うる者あり。て嗤ふ走下り溫嘆うる声振ふて。背高ふ樹うる當標ふ。分銅印うる少年ハ。誰ぞ〻とあきうふ問べ。堀尾忠た吉久の一子。二王丸と登ふう。其と听ふ彼士卒。疾引返ーて木下ふ。斯と報ーうーうべ。藤吉郎

端倉山落城ふ臨とて
堀尾一王丸
初陣武勇
の圖

秀吉感嘆し。しき少年もありつるかな。渠と自方に招きて。大張切名と勸めんに。吁惜や吁惜や。と。憂時い感じそやすぐりける。堀尾親子いなや既に。意の隨の攘ふ。斯てい敵も怖やちつらん。退返さそやと自兵と肱と所るに五十騎斗ぞ殘されける。然ども父子い淺疵も負ず。甚い牽退よと。一呼下辞ゐ。柴田池田ゲ隊伍と斬拔ふ。城中に馳投しゲ。柴田い頻に下知と傳へ。隙間ゐ跡と趨蒐。さうとつけて城と捕稠。鳥銃と打発し。嚴しく攻るさきとゐ。日色西山に淪むとゐども。進軍い些とも怠らず。攻着るとと單騎急ゐ。城中ゐもさ防ぐんぞと。蓐驚動ゐを撤會ゐら夏の常機の坤風。颯と一陣吹起るに。時とて来れと木下秀吉。頓て準備とゐしさし。岩倉山の絶頂ゐる。柴草薪のそのうへ。雄黄焔硝と燼掛。快く待ゐる緯ゐれば。一時に火と懸燒起るに。時と計ゐし。申の下刻。西南の風ふつれ。盪烟天と覆ふ。直地に城中へ吹。即ち。ちらしてこれと奥へ燒。直に城と灰燼さらしめんとと。易うけれども。茲に腹策と貯へられば。秀吉下知して焚草に。水と灌ぐせさそけるに。只烟のみ吹懸て。城中いまだ火いのらず。然ども城兵慌忙き。逃んとされども。前面に。進兵嚴しく十重廿重。又持上に猛火あらて。今に城と燒陷さん。その所觀に老幼女子。泣叫ぶ声い宛に。今生ちらゐる阿鼻叫喚も。斯や在らんと魂俳に懼怖て途と失ひいらせんとゐに機會ちら。柴田暗号の炮と響うせ。岩倉山の烟と濕め。ちらして城中へ使者と遣し。言贈るに狀い名ゐ弓馬の道を



木下の奇計
岩倉山を
燒立て城中の
兵を
降服
せむ

重んず。一端義勢と契りて。斯たるを防戦しられば。丹精の徒
顕はるる。況や信昌既に卒去し。且七郎左衛門も戦死しられば。清
洲殿にも今は已いぬる城中の人々と。悄々と思ひあらんや。主も
なき城に守在て。あたら命を損さんより。速に城を退き。某身を
と全まるべし。尚亦敵対とろいろ。岩倉山の隊伍に命じ。這城
中へ火を懸させ。炬に焼撃りにさんを。思慮を決めて返答られ。
と演るにぞ城中の人既に弓折矢根盡。防ぐべき術なければ。皆
戦死と覚悟を。悲合て在るところへ。浩る使士と得られしを。
轍の鮒の水得し歓び。早速柴田の使吏と迎へ。命のまもむき
つるけを。城中の者食都て。命ぐに助けるで。異義に賢だび
城を付與さんよきに料理をひねと返答しけると使の輩。直ぐに

帰りて柴田に告るに。權六も快く出陣、時に退城もとき〻と
言状に造びけるを。信長大に喜悦し。茅び城中の諸士達へ
退去の絆と言贈らる。これに周て窄城の人々吁有べき所仁沢ぞ
と悦合て當夜に至り。妻子と父母を扶け。ちりぢりに落逃
けて。柴田早速城に投り。公廨〻と紀正て。視遠るところへ秀吉
も山を下て投来り。權六命に對面しければ勝家愉快に打笑ひ。
誠に足下の謀畧高く。容易に城を得ることを。絶倫の功と謂つ
べし。断あるべいぞ君にも缺藉の故るべらいや。先推挙を
なるんぞと謂てらざる其所へ信長城中へ、招ひ勝家の功を感
賞にるに。柴田も木下が智を感じ。これ〻讓て言状しけるに。吾
當城を落せし功は偏に木下が才覚なり。然もれば這遣の功に

面ゝ缺藉所故ー西ゝるべー。とおもひ入て願ふべし。上總介所ー也。
いやゝ落城せー事ハ。藤吉郎ガ智ゆもせー。權六それと用ひまじ
いくぞ容易城と取べき。那まれ柴田ガ功ゆめて。藤吉郎をも
越もべーと宣ゝもるゆ權六も。且面目と施して。藤吉郎と見ん
させ。斯てハ這ゆ止るとも。易ゆき事と徇させゆひ軍と纏しめて
三軍とも。清洲城ゆ還らせゆひ。岩倉城ハ破却させけり。開も
天文十八年。信長織田家と家督せーゝり。這ゆ十有一年と經へ
て。今永祿二年ゆ至り。尾州一國馭て。平均ーゝりとゆへども。猶
根を堅め脚を占んと藤吉郎ガ勸ゆ憑。他國出馬の事を止られ。
日ゝ夜ゝゆ兵武と修練ー。諸士と勵ませ。ゆひけれバこれガさらゆ
國ゝゝり。武藝ゆ連せー倫輩の。清洲と的て集る繆。方水東

ゝゝゝゝこー。中ゆ就て上島主水とゆふあり。中國寇人と稱鋼
らー。鎗術ゆ得ゝる事ありとそ。永祿元年三月の初清洲の老
臣林佐渡守ガ提撕ゆて。織田家ゝ奉公ゝゝゝと。佐渡守ゆ
其術と試ゝふ。岩量とゆひ修練とゆひ。大張名人と見てゝれ。
所業とゝきゆ繕ゆゝ。主水も其身と謹て。誠忠と尽ゝゆそ。
城中の少壯ゝゝゆ都て。その性質と悦合。師とーて鑓と學ぶ
輩。日ゝゆ繁昌ーて城中大概主水ガ門下ゆ屬ーゝゝ。數數の
弟子ゆ尊敬せられ。いゝゝゝ驕慢の心と生ず。無禮の事ども
多ーとゆへども。これと制ゝる輩もなー。況や巧言令色ゆれバ。
柴田佐久間ゆ媚諂ひ。蜜言糖話ゆゝゝふ。ゝゝゝ主水と
賞翫ーけれバ。諂ゆゝる傍若無人。背と嘲ける者もありける。

無るゝ同元年九月。木下藤吉郎織田に仕へて。智謀誰人これに賢だん。城の修復より伊勢合戦。それ〳〵勲功あるとゝて信長ちきりに賞賞し玉ひ。職禄を賜ふをちゝ〳〵なれば。主水心中に これを妬こいうふもなくて這士と退退けんと。思ふより柴田佐久間に種〳〵と方便を求めて讒言しけるが。柴田係素より藤吉郎と憎しと思ふ節なれば。よきし機會あらべと窺ふ。所も這上島主水との内。原来齊藤家の同者なり。本名大沢主水といへて。濃州鶏沼の城主なる。大澤次郎左衛門が弟なり。無るに美濃の齊藤義龍父道三を撃て后信長に道三が聟なれば舅の吊軍やきえんと。義龍これを怖けるゆゑ。密に上嶋主水とゝもに。間者として投ずる。無ども少智の信長なれば

猥に主水を親つけ給ふ。偶河系に召とゝも。柴田佐久間に首とゝて。諸士喧〳〵と列座する。ふ。佞〳〵〳〵に量られねば。空〳〵ふと苦しゝ時節もなられと窺ふさま。信長一時諸士と集めて。穏ふ酒宴と設け。武士と譚じ兵と話し。真中〳〵穏なる胴諸士に向ひて宜ふ。武士の得とし用ふる兵器。時に應じて宜きに往昔は弓と要とし。旦中古より鎗と專とし。〳〵近来は鉄炮もて貴び用ふる事の多し。然して弓と鉄炮とは。遠き用に備へ。鎗と太刀とは相對も。近の敵に利ある器此に今ぞ尾張に鎗と專用ひんとて。第一これと演達し。其鎗の柄に長短あり。長きに利あるや。短きに得あるゆゑ承聞らん。主水は預ての鎗術者なり。試にと論せよ。と命も待ずで上嶋主水。

所詮尊く貴くて。それ鎗法の至極とそなん。短き柄こそ利も多く。且又得もおぼえ。それ鎗の柄は八尺。闊こそ深く徹り。驍こそ輕く揚まつ自由と得ること意の造なり。さて一丈餘の鑓ふおのてら。鎗ふ弱く驍るふ重し。且緩迴そふ自由ならぜ。手決の勝負ふ利なし。是ふ因て鎗の柄は八尺とめて最上とそ。と自己が胸のうちふ。較べて斯こそ舒うけれ。諸士一同ふ其理と正とし。僉もつとも甘心しけると。信長素より長きと好こと初陣の敵なり。こ間柄ふして勝利と得されば。主水が論談心ふ落居ぜ不奥の怒ふて。所へ。木下秀吉出座せり。織田殿さいこひの鎗ふおかされ。藤吉郎と近くめされ。鎗は長きが利とそる故。且短きが得さるや決定ふされと辯論せよと命せふ秀吉拜膜。小原いうでう存ぜぐき。鎗術丹練の者あるふ。訊ねて分明なん。否くそれ然鎗なら。汝が所存はいかれと宜とそ。試ふこれと伸て試よ。唯く小原が所存ふ。長きが宜くはたんと思慮ふも及ぜ返答せり。上島主水心の底ふ怒りとふくむこと二十年。藤吉郎ふうち嘲ひ。噫心得ぬその一言。鎗の長きふ利ありとん。定めて道と諦めつらん。願くばその利とそ。分明ふ示されよ。不肖なれども小原は。鎗ふそ當家へめしつぐれ。壯子輩ふ指能の身なり。その小原が短き鎗ふ。利ありと君く言状せと。足下却て長き鎗ふ利ありとのは譎懐至極。いざ長短の利解とそ。詳ふ所んと盤問。藤吉郎冷笑ひ。小原別ふその利解と辯さるふ。ならざれども。君より所存とのみせとの。所詮ふ隨ひ所存のごく。長き鎗ふ利あらんと。見みるあ言状せり。

駿卒よ聞を領つめて木下上島の當列を定め鎗の長短を論せんとす

と所て上島おもむき摺寄。その長き鎗ゑ利あらんとゝ。いうゐる所謂と以てやりゑ。熟べい。九寸一尺の力より。二尺三尺の太力ゑ利あり。二尺三尺の太力ゑ。四尺五尺の薙力ゑ。利あるとうゝそこれと推もゑ。鎗ハ長きがよき道理と。おもつてゝるのゝ思材ハあらじ。とゝみと上島座高ゑ有り。長短の利と辨へむ。奈ゑ長きがよきゑ。稟もハ疎忽の為り。這已后君の御家ゑおいて。斯むりの詞すかさるゝゑ謹まれよと困むれべ。秀吉顧ゝとうち笑ひ。此ハ異ゑ詞を謂ゝ人ゝゑ。君より汝が所存と謂へと。命せゑ関て稟せしのゝ。足ゝハ短き鎗ゑ。こゝゝ。利ありとゝ思られんが。天下の人ゝ食區ゝ心のゆゝ別ゝゑれべ長き鎗もて輸贏ゑ。利と得まゝきものゑもあらむ。他ゑ指能と做らゝ身が。宥き詞といゝゝゝそゝと其後敢てゝうあらひべ。上島主水大ゑ焦起。小居心い狡くゝも。鎗と把てハ短きとゝて。諸國ゑ脆と練ゝる主水。足ゝが如く舌ゑ信せて。空論もくき輩ゑあらむと。現殺て旬れべ。信長二個を殖ゝゑ。主水ハ短き鎗とゝこ。藤吉郎ハ長きとゝとも。終日舌戰ゝせべとゝ。ゝゝれと測とゝゝれと瀬とゝ。浅深ゑゝ〳〵定めゝゝ。如ゝゝこれ今汝ゑ。馳卒五十人ゝを遣ゝべきゝ。その駛卒ゑ二日ゝゝ。おもひ〳〵の技術と教へ。然ゝゝく主水と藤吉郎と將ゝらゝゑ。駛卒と十知ゝて。長短の利と顯べ。然もれべ鎗の得不得ゝゝれがよきゝ分明あらんと。命ゑ主水ハ喜勇ゝ。おのれ猿冠者一捌ゑ。突顛ゝてゝれんむあと。笑と含んで奉ゝもゑ。藤吉郎も異ゑ義ゑ及ゝて。五十人とあゝゝて。共ゑ市家と退出ゝけゝ。信長いまゝ奉行ゑ十辞ゑ。八尺の竹槍五十本と

作らせて。これと主水に賜り。一丈八尺の槍同じく。五十本と作らせて。藤吉郎に賜さり。然ると百人の駿卒どもに。思慮ある心とて。偏に主水に師範さり。藤吉郎に新参にして。且鎗法に昧らん。猿力称の隊に属さに願へ。うらむ。とめに輩のまゝて。藤吉郎に従へざれば圍を引せて。雙方の人数と定るに分ちけり

木下上島以長短鎗載量附秀吉得勝

上島曾て木下に載ぐきに。あらざれども。假ふこれと絶句せば。原其滄と論ずるにあらざるべし。才智の長と短きと槍に標して謂つるの狡。徒語に図きら。上嶋主水は信長より。命と奉て我獨りかぎりなく是と歓び。三日のうちに五十人と心の隨に丹練させ。大張功誉と做さんぞあと。彼駿卒と呼近付。坐猛ふるそいに。

丹も鎗の法とりつぱ。捌と拿とまとりいも。或は敵の大かに指退けつけのして鎗と要とも。今木下が用ゆる所へ間に剰る長槍名べ。その長槍の尖頭と拮揚づけりり〳〵突伏く。其捌とまるかくつくべし。又拮るに斯せとといろにも念入れ教へられども。従来遣則ざることの名。手足に構身の備に勿く色に心得がく。敢め見へるにとなく。左右驚がし。て止ふけり。又の二日目に暁天より主水頻に心と焦ち。鎗法熟練させんぞのとこに捌出とこに拮よ。斯鎗授べこに拂へと。自身に駿卒のまと執て教へられども卑賤の習氣。愚にして木石に等しければ。上島今は甚得ぞ。大音あげて割りにぐら。再三これと教ゆるに。掌てあげるものにければ。果に瞋て打擲し。持る鎗にて拂倒され心中主水と

上島強く
鎗と数るの
拙指却く
駅卒を
煩らひむ

怨むもの。二四十人ゐ迫びぬれべ。鎗つゝ事左右ゐ勸まべ。脫二日目ゐ
ゐ勇めるが。息猪張て教やとゝへども。更ゐその甲斐なしべ。上島
獨ちら斷頭り。其日も徒ゐ暮しけり。偖藤吉郎秀吉ハ五十人
の駿卒と集め。最温存ゐ教へて謂やう。這遣君の命せゐより。
鎗の較量と試るなり。然して乃郎が承命ハ。長き方の鎗なゐ。
對方ハ主水が短き鎗。渠と我と合せべ。必我鎗ゐ勝利ゐ。
增てや君ゐハ敢しり。長き鎗と好ませ玉へり。今五十人の面くゐ。
二日が際修練うもとも。ちゐくハ其易なるべ。大勢心と一致
ゐして。搦べき嗔ハ而も振らも。無二三ゐ搦起べし。自兵の
鎗ハ一丈八尺。敵の鎗ハ八尺なり。尖頭さゐゐ銛く突ハ。八尺な
りの短き鎗なて。着投べき緯なりべ。その進退合と見謀て。

我ま宜く下知まべ。其嗔いゐも指圖と守り。各力て攘くべき
ぞ。今日ハ軍の首途なれべ。軍神ゐ祭酒まあらせん。汝等も又倚集
て。ちゐと頂戴つらまり。愉快さのしもべ。とゝへ駿卒
輩。或ハ悅び或ハ勇ま。謂せゐ信せて攘くべし。御心おきなく御指
能と。只管祭ひさてまつると當日ハ飽まで飲食して。未午刻ゐ
退散せり。偖二日目ハ藤吉郎。五十人と二組とな。右の方ゐ十六
人左の方ゐ十六人。正面の勢と十八人とし。先正面の十八人敵ゐ向ゐ
て突立ゝ。ゑ二ゑこゐ挑鬪ひ。四逼五逼せり合ゐ嗔扇と拳
て標うべ。左右一度ゐ横合より。會釈なせゐ搦ゑよ。左右の隊
の兵一度ゐ進まべ。正面の兵ハ九人で。二隊ゐ分れ。左右と都て
進むべし。変ゐ應じ機ゐ臨ま。我ゐ扇の形と見て。進退ともゐ

心とゝあよ。心得さるゝと教へければ。駅卒輩い敢ふ相違し。實ふ奥にる事ふおもひ。正面左右遞互ふ。その部伍〻〻と帯合もろさて励合ゝるゝふ。二日目い既五十人。部伍〻〻とよく熟思つ。扇の用合出没と。ふとゝめて覚へされば。木下大ふ悦ばれ。労ふ酬えんつぎまられと。又も酒食を種〻賜へ。進退よきとあしきとを。頒て座配りゑ〻けり。浩りける程ふ三日目い。伍部〻〻の法令よく調ひ進退扇ふ従ゑて。東進を西退くみ。僉木下の意の隨〻。所〻〻せざる繹。さゑぐら一條の絲とゆて。巻き舒もる如くゆり。斯て心易らんと。其日い昨日ふ十陪せる。珍膳美味を山と海と。嚊べ忽鼻とらゝ。食べ頻も新るゝこと。おりゑ斗の温梅ゑ。最懇切ふ饗應ゑ。秀吉海て謂けるゝ。君の

序設のこるゝまふ〻。疎ふせて起食べし。撞くてよく〻せよ励まれ。と頻ふ労ひ慰めしゝ。駅卒輩い大ふ喜び何そゝるびれゑす べき。力涯り根涯り。序下知のこく 捌ゑて。上嶋方を粉ふゑさん。序意安く〻ゑ〻せと。匝らゑ舌とさくもこり。踉め脚を踏みらし。勇過てゝろぶもあり。腹十分ふ満ゝれば。木下ふ厚く禮をのべ鯨靡ふ還る途中ふて。主水が方の駅卒軍。端ふ撲他とゆき番ひ。いふ〻と訊もど。木下方の五十人い。愉快ふ醉ゝれば。咎もやらで冷笑ひ。さゝめき合ゆて往過るゝと。上島方の五十人。羨しげふ後見送る。噫俺們い卯より酉まで。修練せゝて捷れ呵られ。提糧ゝふも愉く。喫もる緯もゑらぎして。漸く許さゝ方俺帰れど。倘明日實の較量ふ迫ゝ。遂てゝ

木下飽まで
酒食を貪て
駿卒の鋭氣
を養ふ
むる圖

四肢ハ満足ゆらじ。武士ゆどつらき者ハなし。と呟く之帰まぬ。斯て上島木下両人ハ。各〻ゑ十の駅卒とめて。これと鍛練こさせらるゝ。二日の日限きれ迫るゝ。較量の事と言状せしゝ。織田殿ゆも好きしく。待まびまゝ所なれば。機墓と擬へ陣を張せ。即馬場ゝ出ゝ行こりて。柴田。佐久間。森。池田。老長諸士悉く。君の左右へ聯綿と。座を列ねてぞ見聲も。古今ゝ例まゝらざる。晴の較量と謂らべし。木下藤吉郎秀吉ハ。ゑ十人のあゝがるゝ一丈八尺の竹槍の。列と攪さを荷けさせ。まらゝゝ馬場へ控来り。右の方ゝ祖俣せり。上島主水の駅卒ハ演習をしも熟せもして。較量も危く思へども。所前ゝもひく約しゝる。日限なれば詮方なく。五十人と牽涎へ馬場の左ゝ

畏蹲斯相對して見る眄ハ。藤吉郎ゞ五十人。よく修練せし兵軍ゆゑ。首尾整しうして静なり。主水ゞ属のゑ十人ハ。隊伍の座順も定まらで。前後左右ゝゆの騒ゞし。信長較量とちゞむべしと。指揮しまゝ。菅谷九右衛門承り。進太鼓と轟く。と擂出しゝる音ゝつれ。木下上嶋兩大将。駅卒輩と牽從へ。諍くと進合も。木下藤吉郎扇と揚。厥ハうられよと指揮のまゝ。二隊ゝ隊伍と主整し。正面ゑりける十八人。一丈八尺の竹の長槍。尖頭とゆらべて搦起さり。上島の隊の駅卒輩。ハコハの竹槍捻蒐。拮退んと涸れども。長槍の尖頭つくして。拮退まゞき陳間ゑし。いゝゞせんと躊躇ところく。木下暮び扇と揚て。左右のうさと摽ゞ。心得うとまぎひゞりみ。隊伍設けし

駄卒輩。横鎗とりて槻蒐る。上島方の駄卒ハ。忽地隊伍
をなすごとふなり。多先撓こて見へけると。木下方の正面隊伍九人
九人と二隊ふこうれ。鶴翼の陣ふ倣て。犇地〳〵と責著れば。上島
方ハ色めき起。崩蒐ると主水声うけ。厥所と拮退け那所を
つけ。進め〳〵と下知もれども。隊伍もそ〳〵ちらねば。既浮足
ふなりうると。木下扇を颯と開き。厥ら軍ハ槻贏こうて進め
や進めと下知もれば正面九右衆声合せ一度ふ吐と喎捲るふ。
上島方の五十人。一個も止まる駄卒ハなく。脆くも輸て引退く。
信長これと御覧ゐり。頻ふ矣門ふりもひ。收鉦と打せもひ
ゑれば。木下方の駄卒ハ。列と整〳〵犇返もふ。其相雄〳〵く
見へゑうし。主水ハ大ふ赤面ーなるら。今一遭と望むふり。柴田
伝久間も。上島と勝せんあと懐ひけるゆゑ。君の御前と調言ければ。
藤吉郎と呼ひ。方僅一遭と云合べきや。ふ何や。と問ぜもふより
木下秀吉言状ーけるハ。軍ハ一度ふ限りりふさも。幾會ふても敵
来らば。迎へてこれと戦ん。上島二遭戦挑まば。決して吾ふ
もまけ。白遭ふも辞退ハせじ。と最健起て登〳〵ゑば。上島主水
這遭ハ猿面ふ繋と吹せんあと。自兵と呼迫け。戦ふ術と細ふ
教へ。正魁ふ進ませゑり。木下秀吉這遭ハ。正面の兵二十人
犇地突ふ槻起て。ろゞと四五間引退く。主水得ゑうと指揮
と烈ゑし。踏入〳〵槻蒐る。木下方の駄卒ハなれ待遇て。退
起れば。主水ハ大ふ声と蒐もハ勝ゑるぞ。すゝめ〳〵と頻
ふ下知ゑ。十間ばり趨逼ゑり。時分ハよりて藤吉郎。扇と

木下上嶋
鎗の長短を
爭ふ場ゑ
藤吉郎
勝を
得る
圖

揚れば左右の十人。横猪ふ吸と突蒐る。主水が駄卒思ひもらぬ。右顛左倒ふ驚き起。隊伍崩るゝその所と。正面の兵二十人。執て返して突起るべ。一人も立得ぬ天足地盲し。俯て膝と掬るゝ。仰て胸板踏るゝ。這〳〵ふ引退く。既這出ぬと止まれと藤吉郎が退扇。斉陣ふ為らも收鉦と。時と違へて木下方。凱歌喊りて隊伍と立れば。主水再こ面目と失ひ。怒と匿して蹲る。信長始終と得と見ゐ。藤吉郎が人數の進退。神変不思議と謂つゝ。彼と周ひて大将ならば。必定功と建べきものと。心中深く感嘆る。彼両人と近く呼き。今日の戦量未練の駄卒が事ゆへて両士が上ふ関らぬ。主水自身ふ鎗と執る。紆き鎗ゆて心の柔ふ。定んで勝利と得るるべし。

然ばれば主水が恥ゆもあらぬ。藤吉郎ハ賢くも。人數と遣ふ法と男ひ。無二無三ふ搦起ゝれば。これハ槍術なりゝ。あらぬ。二日の際駄卒の指圖。さぞ辛労せ〳〵ならん。要時心と慰めよ。と酒肴と両士ふ賜り。百人の駄卒へも同〳〵樽と貺されゝうべ。主水も豹面目と施し。恩と謝して退出せぬ。然ども木个と怨の心。這ふ至りて百倍ゆ。柴田佐久間ふ説言して。猿冠者何ぞ過失あらぬと目と側ぞて待居る。又秀吉ハ上島と。怪しきものと思ひつるゆゑ。隈〳〵と心と属るふ。渠ハ原来中国生ゆあらぬべし。定んで近国の産ならんと。一箇の工夫と廻らつ。中村なりける姉聟うし。孫助吉房とひそふふ招き。對面して言ふ。剛力這清洲の城中ふ。上島主水

とのゝものあり。中國漂士とゝのゝとゝども。屢怪しき挙止あり。彩る
ゝ這程彼主水。一個の健児と抱へんとそ。鞠ゆるゝと所出せり。
それ今足ゝ憑む條あり。願くゝ上島が邸ゝ住とゝ。渠が産
れし本國を探出して。ゝれゝ。其方便ゝ足ゝとめそ。美濃
のものゝとゝひそゝるゝ。上島うゝらぢ心解て。召仕ゝ猩因家ゝ
らんゝ。動静賢ゝ悟られざるゝ。做果せてゝと憑むゝぞ。素より
縁者の弥助ゝれゝ異義ゝ。これと諾ゝて。その夜のうちゝ羈旅
の準備し。美濃より来るゝ有成し。縁者ありける清洲
の街の。源左衛門と成證として。上島主水が邸ゝ到る。奉ゝず
ゝと願ひけるゝ。欲ゝ思ゝ機會ゝれゝ。便即弥助とめしゝ。
健児として役けるゝ。濃州生と聞ゝ。懐慕遠ゝ思ゝゝ。時ゝ

美濃の猩と同ゝ弥助も来ゝ。濃州ゝ。活業のゝゝゝ往来せし
ゝ。頼めゝと知り。同ゝ應ゝて登ゝ。今ゝ疑ゝ心もゝ。召使
ゝゝと弥助ゝ頼て。秀吉が内意承ゝることゝゝ。朝暮主水が
身のうゝと際ゝる隙ゝ窺ひける。那這ゝ是歳も月逼て。十月
と移来ゝき。其ゝ國て茲ゝ犬山の領主。津田十郎左衛門信清
（小野守とも）とゝゝ仁あり。此ゝ備後守信秀の舎弟。津田與次郎信
康の嫡子ゝり。然ゝ信長とゝ從弟同胞ゝて。親き間ゝれゝ。
上總介ゝも懇切と盡し。又信清も忠義と竭せり。然るゝ信
清が近臣ゝる。小河甚九郎とゝゝ者あり。佞辯利口の邪族ゝ
ゝて。蜜と譚し糖と話も。これゝ信清もゝゝ心惑され
て。寵愛ゝらびゝき来ゝ。自己一人出頭ゝ。新行の墻と放る

が像し。遂に津田の氏と許されて。津田求馬と革名せむ。それ
さく過分なるが上に。剰へ采地の掌方とゆて。求馬一個に任せ
られば。愈これに采利と得て。百姓の困苦と顧ず。君命なり
と言徇し。非道の責穡と禁裏め。麗娼女と不義に勾引。
おのれが意の隨にして。後に求馬も制事に倦家臣二個に
これと信せ。村々の事と執紀させて。徒暁暮と酒色にのみ。身と
淫してぞ歓楽しける

浅野弥兵衛逼犬山騒動附木下鎮此

樹の曲るに其倒やすく。直なるに其長やすし。這に邪曲の津田
求馬に貪欲淫ゆとりくども。身の淫楽に執事とも成さで。二
個に毒害にこれと任せ苛き事のみ行えるに。類へよりその友と
りに三個のあも主に劣らで貢穡と細禁收む。園圃の樹産山林の
菓實。竹木絹布に至るまで。孫るくまでき苛政に責られ采地の
百姓愈齊く。怨謗りて罷ひまるく。剛方にも事や起るべきと。石卯
と採ありさまなり。茲に清洲の藤井又右衛門が嫡に。浅野弥兵衛
（又右衛門が妹の子にして津島の浅野弥右衛門長勝が長男なり）
早世して家と賢べき男子なければ。浅野弥兵衛と養子にし。
これと乙女に歸せしが。這比犬山求馬が家保。蜂振沙助と
りあの。病に捕られて。代に緯とへよりこれば。弥兵衛と憑んでこれ
に代らせ。小河が家に務さるに。古参二個の家保輩は。浅野が
廉直なるを嫌ひ。退退んと思へども。代なければ詮方なく。其采に
て棄置さり。既十二月の中澣。五穀收納の撿使として采地中と

廻りけるゆ。百姓輩ハ預てより。小河の政事と大ふ怒を。明日ゆも清洲へ詣へんと。こゝろ構の機會ゐれば。三個の檢士ふ礼義とせざるを二個の家保ハ百姓輩が。無禮ハ所謂ある事と。知れども。弥兵衛更ふとれと知らねば。百姓輩ふ打向ひ。爾們いろゐる存念ゐて斯迄領主の保士ふ。言語同斷のこを禮とゐもと。誡諭せば百姓一同。牙を鳴して呑ゐる。禮義ハ上より行れ。慈悲ハ采主より施もゐるふ。無慈悲無禮義の采主が下ふ。ゐふとて禮義のあるべきぞ。無禮とゐもとゐ。各〻賢もよく知るこゝろ。心ふ問て見まへと。最無礼もきこゆる謂ざるを。邪曲ふ染ぬ弥兵衛ゐれば。大ふ怒てやをれ土生。論ふ絶るその詞上と。挑ゐ侮る條。悪んでもゐゐ憎んづべし。貪一〻ふ摘摘。窮命せんと罵りゐれば。百姓どもふ

噪し言を謂せど捷損せと。異口同音ふ呼ぶま〻。蔟〻発と騒ぎ竹槍短鎌棍小杵。ゐ〻ふ打振り數百人。三個と中ふ推擣圍。口囂〻ふ嘩起ゐば。二個の家保ハ預てより。心ふ覚ゐる偉ゐ。詞も返さを遁んと。逃肢度して身岡と。弥兵衛ハ怒と発し。其義ゐらば這方ふも。救〻と跳り出。技量のゐどと見ゐやとのみ〻。莊宮と捕て梓胡索とうけんと做と見て。百姓輩數十人。鎌竹槍とひらめし。打て蒐るふ浅野弥兵衛。堪うゐて太刀掣驟し。大勢が中へ蒐投て。右横左横ふ斬起ゐば。その太刀尖と蒙て。疵と得るゐの多うゐれども。百姓輩ハ退〻勢増し。弥兵衛獨とうち捕んと。弄地り隙ふ二個の家保。許せ許せ。逃出まとやをろ許してゐるべきぞ。殺せ殺せと動揺めき〻ち。終ふ二個と敵伏ゐ。弥兵衛見るより太刀と

浅野弥兵衛
誤て犬山領の
百姓輩ヲ
困せる
図

うち振。韋駄天走ふ跳来り。百姓輩と砕散し。二個と技けく引起れど。打擲せられて。腰膝起ぜ。弥兵衛も餘りふ鞠果。切て張本一人と。捕て拏立歸らんと。思ふ所ろ百姓輩。増〳〵競集て。幾百人とうづと知らぜ。弥兵衛大ふ驚立。斯だうある大変ハ一朝一夕の事ふあらず。これ程深き所謂あらん。我も共ふ伴邪せられ。這ふ徒損せんよりハ。遁るものと。隙と見まし。唬て一方と斬拂へば。この太刀剛勢ふおそれてや。左右へと散る隙ふ。弥兵衛〳〵虎口と遁れ。清洲と當てひき退き。犬山ふ清洲身と辛ふぞ城下の。関口まで走着機會うら端ふ〳〵秀吉ふ行遇う。藤吉郎と弥兵衛ふ。素疎らぬ縁者ふれば。浅野弥兵衛ぐ方僅ふく。血刀提て走来りしと。徒事ふらぜ思ひしふ。

その所謂いふと驚問ふ。弥兵衛も僅ふ安途し。有のまふ〳〵告ふしふ。まづ自宅ふ来られと。秀吉弥兵衛と圍護ふ。偖犬山の百姓輩ハ。浅野と趕て来りしぐ。城下ふ投て。弥兵衛と見ふしふ。何ハせんと躊躇ところふ。水下秀吉出来ふ。百姓輩ふうち郷高ふて。何故浩る騒動ふぞ。ぐれの村の品輩ぞ。大音聲ふ問ふると。百姓輩ハ答へていふ。這ハ犬山領の民ふるぐ年来来地の奉行ふる。小河求馬とふふを者。非道の貢稲ふ民と苦しめ。謾慾ふ私欲とふ。これがふあふ来地の衆民。清洲城へ訴へと。評定一変せしふところふ。求馬ふ家保まふ〳〵来り。無理ふる收納せよとふふを。休事と得ぜ。舌戦せしと。新家保ふ力とぬき。百姓輩ふ負疵ふ。某者ハ城下へ逃投されば。快解死人ふ

あれと。听より秀吉頭うちふり。厥ハ爾們ガ非ラヌ。犬山城の保依軍。亦道とゐさび穏便ふ。清洲ヘ参て訴めべし。越訴ゐれども慈悲深き。君ふ渡らせ給ふ。民の塗炭と听しめさば。犬山殿ふ通達あつて。これと許させ給べし。それと何ぞや民の身として。采主の家保ふ敵對ふ礼。況やそれが下として。悪人さうとも上の者と。解死人ふ請法やある。ふ敵とも過分とも。論ふ絶さる事ふ成ん方僅我私ふハ鎮サーがたし。君の命と蒙て。きつと孔明して とらせん。今日ハ赦して返さるべし。さらば歸て清下紀とまて。高声ふ謂彌せば。百姓輩ハ懼怖れ。首と抱へて退散せり。然るとふ秀吉ハ市前ヘ出て。犬山騒動の事と言狀ふ〳〵ふ。よきふ計らひ鎮もべきよし。君の命と奉さうらべ。先犬山の百姓とよび出し。公廨ふ入て一應。事の始末と問極ふ。舌記させて采収め。さて百姓を退けて。次ふ河が家保と召出せ。両個の輩ハ脚腰の自由ふらねば鞭ふ成ふせられ。漸く公廨ヘ這出つ怖る〳〵る躋る。木下彼と鞠問しけるう敢のうちハ那這と陳して實といさりければ。藤吉郎高响ふ。彼口記と讀あけう。これふ二個ハ怖伏ふ。清設のごとと赤面ふて。然して求馬と呼出しこれといふと詰問ふ利辨減さぞ呑〳〵そいふ。都て家保の所為ふれば。小子員て存せぞとりふと家保倘もあ返して。主人求馬の下辞ふよりふ。ふ執計ふくものふれば。俺們何とて私せべき。召然ふ那般ふと主従の道も打忘れ。推諍ふを木下制止し。双輩ともふ爭ふべらば家保のふのとよりて生ハ奉行の軌則よりぬ。従家のとちぐハ僉渾て。

主家のあやまちと謂つゝ。犬山領の奉行職と命ぜられしハ。求馬あらぎや。家保ハ求馬の家人なり。然もれば這遣の非義非道も求馬の解説連ゞ。大罪なりと謂放てば。求馬ハ一句の若もなく。怖入て伏しなり。藤吉郎游てなれば。斯ては是と非と分明なれども。猶決断といへべからんと犬山城の貢墻藉とこうよせて。内外巨細ふ穿鑿するふ求馬あらびふ家保傍ゞ非道ふ貪るところふして。曾て信清の命ならぎ。這事とめて缺もなく。信長ふ言状しければ。織田殿大ふ怒せ給ひ。民ハ國家の大原なるふ。その人くと苦めて。おのれゝゞ栄耀ふ嗜る。斯る事より騒動起り。終ハ國家を滅すること。這等のさゝもくならぎ悪人輩と懲さんなり。重き罪過ふ處まゝと。命下るゝと藤吉郎實ふ重恩の主君と云ぞう。百姓輩と欺て詰る騒動なを罪ハ決も死をべ遁ぎゝ。それと助る両人とても罪と同じふまるなり。然るふ浅野弥兵衛こゝハ。新参といひ且ハ年ゞ一紙半銭のこゝくゝなく。百姓輩ゞ不礼と怒て。忍ぶふ堪ぎ双傷せり。然もれば求馬家保傍ゞ罪と同じふまべうらび。されども向後犬山へハ足とむけられぎゝ。命付られたるべゝと。言状せゝべ信長ふも。もつともの理ふ。あゞされて。其侭指揮とせられゝり備犬山の百姓ハ張本二人と。牽出ゝ其城下ふして。這とさなふ。案主違背の法令と。明ふ示めゝゝ其のち弥兵衛ハ藤吉郎ゞ大量ふ感伏。下下ゞ家ふ客として多くの家事と執賄ひぬこれゝなふ藤吉郎ゞ犬山騒動の截断法と。憎るものハ嘲諾り。勇ぶるのハ讃嘆。

その風説のごとく此歳も暮て。永禄三年の春を迎へてより然るに正月下澣より。駿河の城主今川義元上洛して。足利の天下を補佐し。四海一統の功を達んぐあり。伊豆駿河遠江三河四箇国の軍兵を率従へ。不日に海道を馳登る其沙汰ひとぐなれば。信長これを聞とひとぐ。先防戦の部伍せんと。満城の諸士を呼集め。各〻の意權を問されけるに佐久間信盛進出。左右を顧て発言まらく。這遭義元上洛の風説何般なりて必定なるべし。其所謂いんとこれを推まに。今足利を補佐まべき斯波細川はよのやく衰へ。これに代らん家なそへ。今川ならではあるべからざ。義元は剛き東海道の國〻大半是を領し。増て北条武田の両家渠を助て在なれば。威勢ますます盛にして。飛龍跳虎も賢ぶべくもぞ。然まれば誰かこれに敵せん。上洛なさんと推通るを。遮り止んとあらんか。螳螂怒て立車を嚙。蜻蛉惑されて懸燈を含まんとまるに異ならじ。よくく賢慮とめぐらしまへと。諫る尾に属柴田林も詞を共に。實に信盛がいまを所。中用にはなく安全の籌策こそ肝要なれと。諫言なせども剛氣の信長用ゐる色はあらざりけるを

繪本豊臣勲功記初編巻之六終